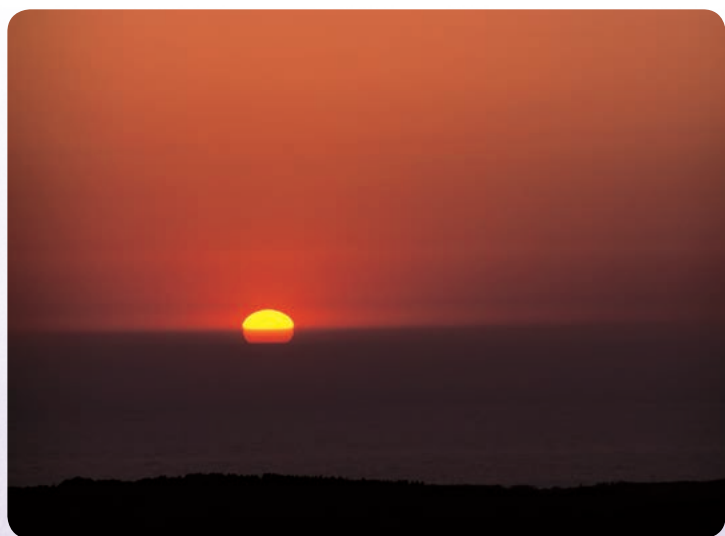


朝のこない夜はない

山首 鈴木正修



法華經の教えを

愚直に実行しましょう

無知の知

「私はろくに学校も出ていないし、学が無く物を知らない」と自分を卑下する方がありました。その方に対して私は「人間一人が知っていることは、どんなに物知りの人でもたかが知れているものですよ」とお話しさせていただきました。実際、博覧強記と言われるような人でも知っていることには限りがあります。ノーベル賞を受賞するような人が何でも知っているかというところではありません。逆に人間は、本当に偉くなればなるほど、悟りに近づけ



ば近づくほど、自分は本当は何も知らない、ということに
気づきます。悟りから遠い人ほど、自分は何でも知っている。
自分は偉い、と思ってしまうものです。

「人間は考える葦である」と言ったフランスの天才ブレ
ズ・パスカルは『パンセ』の中で次のように述べています。
「私は自分を取り巻いている宇宙の恐ろしい空間を見る。
そして自分がこの渺茫たる広がりの一隅につながれている
のを認めるが、なぜ他の所よりもこの所に置かれているの
か、なぜ私が生きるために与えられたこのわずかな時間が、
私の先にあつた全永遠と私の後に続く全永遠とのどこかに
定められないで、ここに定められたかを知らない。私がい
たる所に見るのは無限のみであり、それは私を一箇の微分
子のように、また一瞬の間続いて再び帰らない影のように
取り巻いている」



人間が生きている時間はせいぜい長くても100年ぐら
いでしよう。それは宇宙の永遠の時間からすればほんの一
瞬です。その永遠の時間の中の一瞬に、なぜ自分がここに
いるのか誰にもわかりません。パスカルは言います。

「私が知っているすべては『自分がやがて死ぬべきもので
ある』ということ。にもかかわらず、避けられない『死』
というものこそ私が最も知らないものである」

要するに「私は自分がどこから来たのかも知らず、どこ
に行くのかも知らない。結局何も知らない」とパスカルは
言っているのです。

古代ギリシアの大哲学者ソクラテスは「自分より智慧の
ある者がいるかどうか」について神託を受けたことがあり
ます。神託とは、巫女さんを介して神さまに伺うことです。
その時の神さまの言葉が「汝より智慧のある者はいない」



というものでした。ソクラテスは「自分より智慧のありそうな人はたくさんいるのに……」^{おも}、次から次へ人を訪ね、政治家、詩人、さらに大工など市井の人にも声をかけましたが、皆、何か知^しっているようでいて肝心なことになると何も知りませんでした。そのうちにソクラテスは「みんなは知^しったようなことを言^いう。また知^しったようなふりをするが、本当のことは何も知らない。みんな自分の無知を知らない。しかし私は自分の無知を知^しっている。だから神さまは、私より智慧のある者はいないと言^いわれたのか」と思^{おも}ったそうです。これを『無知の知』^{むちのち}と言^いいます。

では、本当に無知な私たちはどうすればよいか。道元禪師が言^いっておられます。

「仏道に入るには、我^わがこころに善悪^{ぜんあく}を分^わけて、よしと思^{おも}いあししと思^{おも}うことを捨^すてて、わが身^みよからん、わが意^いな



にとあらんと思^{おも}うところを忘^{わす}れて、善^よくもあれ、悪^あしくもあれ、仏祖^{ぶつそ}の言語行履^{げんごあんり}に随^{したが}いゆくなり」

「仏祖^{ぶつそ}の言語行履^{げんごあんり}」とは、これまでのもろもろの仏さまや菩薩^{ぼさつ}さまが言^いいのこされた言葉^{ことば}であり、また歩^{ある}かれた跡^{あと}ということです。それを凡夫^{ぼんぷ}のはからいで思^{おも}い計^{はか}らうことをやめて、ただそのままに頂戴^{ちやうだい}し、そのままその跡^{あと}をふむということです。

これを実践^{じっせん}した一番良^{ばんよ}い例^{れい}が周利槃特^{しゅりはんどく}だと思います。

愚直^{ぐちよく}な実行^{じっこう}

周利槃特^{しゅりはんどく}は「愚^{おろ}か者^{もの}」の象徴^{しょうちゆう}です。自分^{じぶん}の名前^{なまえ}を覚^{おぼ}えることさえできませんでした。しかし周利槃特^{しゅりはんどく}はひたすらお釈迦^{しゃか}さまの言^いわれた通り掃除^{そうじ}をすることによって、法華経^{ほけきやう}五百弟子受記品^{でしじゆきほん}においてお釈迦^{しゃか}さまから「将来^{しょうらい}仏^{ほとけ}に成^なる」



という記別きべつを与あたえられたのです。説法せっぽうの座ざに連つらなつた弟子でしの一人「周陀しゅだ」とあるのが周利槃特しゆりはんてくのことです。このことは私わたくしたちに「知識ちしきではない。生半可なまはんかな智慧ちえでもない。愚直ぐちよくなまでにお釈迦しゃかさまの言いわれたことを信しんじて実行じっこうする人ひとが仏ほとけに成なれる」と教おしえてゐるのです。

日蓮聖人にちれんしょうにんの御遺文ごいぶん・法華題目鈔ほつけだいまくしょうに次のように書かかれてゐます。

「夫それ仏道ぶつどうに入る根本こんぽんは信しんを以もつて本もととす。五十二位いの中うちには十信しんを本もととす、十信しんの位くらゐには信心しんじん初はじめなり。たとい悟りさとなければども、信心しんじんあらん者ものは、鈍根どんこんも正見しやうけんの者ものなり。たとい悟りさとあれども、信心しんじんなき者ものは誹謗闡提ひぼうせんたいの者ものなり。善星比ぜんしやうひ丘くは二百五十戒かいを持たもちて四禪定ぜんじやうを得え、十二部經ぶきやうを諳そらにせし者ものなり。提婆達多だいばだつたは六万八万まんの宝蔵ほうぞうを覚おぼえ、十八變へんを現げんぜしかども、此等これらは有解無信うげむしんの者ものなり。今いまに阿鼻大城あびだいじやうにありと



聞く。又鈍根第一の須(周)利槃特は、智慧もなく悟りもなし、只一念の信ありて普明如来と成給う」

〃仏道を修行しようとする者が実践すべき五十二の位階の中でも、十信の位をもって根本としている。この十信の中でも、信心が最初の位となっている。たとえ悟るところがなくとも、信心のある者は学識や才能の低い鈍根であつても、正見の者といえる。かりに才能があつて悟りがあつたとしても、信心のない者は、仏になるべき種子を断じてしまった者である。例をあげてみるならば、善星比丘という人は二百五十もの戒をたち四種の禅定を悟り、仏一代の經典を暗記したほどの者である。また提婆達多は六万とも八万ともいわれた数多くの經典をおぼえ、十八種類に及ぶ神通变化の術を現わしてみせることができたが、智慧は優れていても信心が欠けていたので、今でも阿鼻地獄に堕ちているということである。それに反して鈍根の第一といわ



れた須^す(周^{しゅう})利槃^{りはん}特^{とく}は、智慧^{ちえ}もなく悟^{さと}りもない人^{ひと}であったが、ただ一念^{ねん}の信心^{しんじん}があったので、普明^{ふみょう}如来^{にょらい}となられたのである。

孔子^{こうし}の弟子^{でし}・曾子^{そうし}

孔子^{こうし}の弟子^{でし}に曾子^{そうし}(呼^よび名^なは参^{しん})という人^{ひと}がいます。が、その人^{ひと}のことを孔子^{こうし}は「ああ、参^{しん}はのろまだね」と『論語^{ろんご}』の中^{なか}で言^いわれています。

曾子^{そうし}は孔子^{こうし}より40歳^{さい}くらい年下^{としした}で、孫^{まご}のような存在^{そんざい}でした。その曾子^{そうし}を孔子^{こうし}は非常^{ひじょう}に可愛^{かわい}がりました。あまり要領^{ようりょう}は良くないけれども、言^いわれたことを一心^{しん}に実行^{じっこう}したからです。

やがて曾子^{そうし}は孔子^{こうし}の孫^{まご}・子思^{しし}の家庭教師^{かていきょうし}になりました。そして、その子思^{しし}が孟子^{もうし}を教^{おし}えたのですから中国^{ちゅうごく}を代表^{だいひょう}す



る思想家・孟子がこの世に出たのは曾子の功績が大であったと言えらると思ひます。

ある時、大勢の弟子に囲まれた中で孔子が「曾子よ。我が道は一筋の道で貫かれてゐる」と言つと、曾子は「はい」と答えました。そして、孔子がその場を離れると、弟子の一人が「あれはどういう意味ですか」と曾子に尋ねました。すると曾子は「孔子先生が貫いたものは一つ、忠恕だけなのです」と言ひました。「忠恕」とは「慈悲」のことです。愚直なまでに孔子の言われたことを実行し、孔子の生き方に間近でずっと触れてきた曾子には、その教えの深いところが即座にわかつたのです。

孔子が曾子に説いた『孝経』という書物があります。この中には「親孝行」のことが書かれています。



ある日、家でくつろいでいた孔子が傍にいた曾子に問いかけます。

「昔の優れた人たちは無上の徳を備え、正しい道を踏み行つて天下万民を教え導かれた。それで万民は睦まじくなつて、上の者も下の者も不平を抱いて憎みあうことが無くなつた。お前はその無上の徳、正しい道とはどのようなものか知っているか」

曾子はすぐに居ずまいを正して答えました。

「私のような愚かな者がそのようなことがわかるはずがありません」

すると孔子は言いました。

「よいか。孝行があらゆる道徳の根本なのだ。我が身は両手両足から髪の毛、皮膚の末々に至るまですべて父母から頂戴したものである。それを大切に守って傷めつけないようにするのが孝行のはじめなのだ。立派な人物になり、正



しい道みちを行おこない、名なを後世こうせいまでも高たかく掲かげて、父ふ母ぼの名なを広ひろく社しゃ会かいに知しらせろ。それが孝こうの終おわりなのだ」

曾子は亡くなる時に自分の手足を「どこにも傷などないだろう」と言つて、弟子たちに見せたそうです。そして「孔子さまに『父母からいただいた身体を大事にせよ』と言われたから、私は生涯、身体を大事にしてきたのだ」と言つたのです。

曾子そうしは一心しんに孔子こうしの教えおしを守まもったのです。孔子こうしの教えおしを
 本ほん当とうに実じつ行こうして、弟子でしたちに伝つたえたのです。だから孟子もうしに
 も、孔子こうしの教えおしが正ただしく伝つたわっていったのです。

ししょう
おし
まも
師匠の教えを守る

最近、ある雑誌で、小児外科と消化器外科の専門医の対



談（だん）を読み（よ）ました。その対談（たいだん）の中（なか）で二人（ふたり）の医師（いし）は共通（きょうつう）する話（はなし）をしていました。

手術（しゅじゅつ）後は絶対（ぜったい）に合併症（がっぺいしょう）を起こ（おこ）させてはならない〴〵ということです。

合併症（がっぺいしょう）とは、手術（しゅじゅつ）後に新（あら）たな重（おも）い病（びょう）気（き）に罹（か）ることです。
ひとり
一人（ひとり）の医師（いし）は「手術（しゅじゅつ）の時（とき）に血（ち）を出（だ）してはいけない」と師（し）匠（しょう）から言（い）われたそうです。血（ち）を出（だ）すと後（あと）で合併症（がっぺいしょう）になりやすいからです。だから「時間（じかん）が かかってもよいから血（ち）をで
きるだけ出（だ）すな」というのが師匠（ししょう）の教（おし）えだったそうです。
するともう一人（ひとり）の医師（いし）も「私（わたくし）も同じ（おな）です。『出血（しゅっけつ）は最小限（さいしょうげん）にせよ』と教（おし）えられました。だから、私（わたくし）も手術（しゅじゅつ）の時間（じかん）が か
かることがあります。ある学（が）会（かい）で手術（しゅじゅつ）が遅（おそ）いことを指摘（してき）さ
れましたが、私（わたくし）は『手術（しゅじゅつ）は時間（じかん）を競（きそ）うものではありません』



と反論（はんろん）しました」と言（い）っていました。

以前（いぜん）、この医師（いし）の所（ところ）に中国（ちゅうごく）から研修医（けんしゅうい）が来（き）たことがあり
ました。その研修医（けんしゅうい）も「先生（せんせい）は手術（しゅじゅつ）が遅（おそ）いです」と言（い）っ
たそうです。そこで、「手術（しゅじゅつ）は時間（じかん）ではない。とにかく血（ち）
を出（だ）さないことが大事（だいじ）なのだ。そうすれば合併症（がっぺいしょう）のリスク
が少（すく）なくなる。手術（しゅじゅつ）をした後（あと）、心配（しんぱい）がない。これが大事（だいじ）な
ことだ」と言（い）うと、得心（ていしん）がいったのか、中国（ちゅうごく）に帰（かえ）ったその
研修医（けんしゅうい）は、ゆっくり丁寧（ていねい）に手術（しゅじゅつ）をするようになったそうで
す。他の医師（ほか いし）からは「日本（にほん）で何（なに）を憶（おぼ）えて来（き）たのだ」と言（い）わ
れたそうですが、その医師（いし）が手術（しゅじゅつ）すると合併症（がっぺいしょう）が起（お）こらな
いので評判（ひょうばん）が良（よ）くなり、患者（かんじゃ）さんが大勢（おおぜい）来（き）るようになった
そうです。

余談（よだん）ですが、国（くに）が補助（ほじょ）をしてい（い）る医療費（いりょうひ）は毎年（まいとし）どん
どん増（ふ）えており、去年（きょねん）は過去（かこ）最高（こうこう）の41・5兆円（ちやうえん）だっ（た）たそうです。



このことに対して心臓外科の権威で先年、天皇陛下に手術を施された順天堂大学付属病院院長の天野篤先生は外科医の立場から、医療費を減らすには合併症を減らすことだ、とおっしゃっています。合併症で重い病気になる場合、一人1億円くらい余計にかかることがあるそうです。だから合併症を減らさなければいけないと天野先生は言われるのです。

そして、天野先生もやはり「血を出さないようにするべきだ」と言われていますが、「手術は速いのが良い」とも言われています。前出のお二人の先生と違って天野先生の場合、専門は心臓手術なので、例えば、人工心肺を長時間付けておくと合併症を引き起こす可能性が高まるのだそうです。師の教えはどの分野でも経験に基づくものです。ですから師の教えを愚直に守り通すことは、どんな世界でも大事だと思えます。

